

平成二十五年 NHK全国短歌大会

受賞作品決定

新作十五首(テーマ自由)募集

近藤芳美賞



生き行くは楽しと歌い去りなぐら

暮下りたれば湧く涙かも

人間が人間であることの絶望を

昨日に見たり

過ぎしといふな

戦後短歌の牽引者であった近藤芳美氏は、今年で生誕一〇〇年を迎えます。その作品は美しい相聞歌から歴史と対峙した批評精神あふれる作品まで幅広く、半世紀以上歌壇に寄与されました。また、NHK全国短歌大会の選者やNHK学園通信講座「短歌」講座の創設者として、多くの短歌愛好家の指導にもあたり、短歌の裾野を広げることに尽力されました。生誕一〇〇年に際し、その業績を称え、短歌がより大きな広がりをもって皆さまに親しまれるため、「近藤芳美賞」を設けることとしました。みなさまの奮ってのご応募を心よりお待ちしております。

近藤芳美●プロフィール

1913年5月朝鮮の馬山浦(まさんぽ)生まれ。2006年6月93歳にて逝去。本名、芽美(よしみ)。「戦後短歌」を牽引した歌人。みずみずしい相聞の第一歌集『早春歌』から出発し、技術系の知識人として一貫して政治や社会に鋭い関心を寄せ、批評精神を保ち、生き方を問いつつ続けた。『新しき短歌の規定』をはじめとする歌論も、歌壇に大きな影響を与えた。

31年に「アララギ」に入会。中村憲吉、土屋文明に師事。47年「新歌人集団」を結成。48年に第一歌集『早春歌』、第二歌集『埃吹く街』を刊行。51年、「未来」創刊。日本歌人クラブの結成時のひとりであり、長らく現代歌人協会理事長をつとめた。

歌集は他に『黒豹』『祈念に』『希求』『岐路』『岐路以後』など。沼空賞、詩歌文学館賞、現代短歌大賞、高藤茂吉短歌文学賞などを受賞。96年に文化功労者。

【投稿用紙】

裏面の所定の用紙(コピー可)を使用してください。投稿用紙は、NHK学園のホームページからもプリントアウトできます。応募は一人一組に限ります。どなたでも応募できます。

- 投稿作品は、自作で未発表作品に限ります。
- 二重投稿(同一作品及び酷似作品を新聞、番組、雑誌、結社誌、コンクール、インターネット等へ投稿)は、固くお断りします。
- 同一作品、酷似作品が先行して発表されていた場合、入賞を辞退していただくことがあります。

【投稿作品】

新作十五首
テーマは自由です。タイトルをつけてください。

【投稿料】

一組十五首 五,〇〇〇円

【送金方法】

自由題・題詠の部と同様に、郵便小為替(定額小為替、普通為替を郵便局で購入)、現金書留、郵便払込のいずれかをご利用ください(切手の代用は不可)。

口座番号…001800-21357944
加入者名…NHK学園 短歌大会事務局

【賞】

◆ 近藤芳美賞……全選者による最終審査会を経て、一組(十五首)を選びます。

◆ 選者賞……十五首を一組として選考し、三名の選者が各々一組(十五首)を選びます。

◆ 近藤芳美賞・選者賞ともに、NHKホールのステージで発表・表彰します。

【選考】

全作品の選考会を行います。入賞内定作品のみ、12月上旬に文書でお知らせします。

【発表】

近藤芳美賞・選者賞に入賞した作品は、大会当日(平成26年1月18日)発行の「NHK全国短歌大会入選作品集」で発表します。

【投稿締切】

平成25年9月30日(月) 消印有効

選者……



岡井 隆
「未来」編集・発行人



篠 弘
「まひる野」代表



馬場あき子
「かりん」主宰

近藤芳美賞

(新作十五首)

「真夏のシアン」

熊谷 純

(広島 39歳)



アルバムを開いてみる。夢を持ったわたしの笑顔がまぶしい。その頃、漠然と十年後、二十年後としか思わなかった世界に今、立っている。絶対に想像できなかった姿になって。もちろんすべては自分の責任である。先のことを考えれば不安でたまらなくなることもある。しかし、こんな自分を受け入れて生き得る限り生きてゆく。未来のわたしは、この十五首をどんな気持ちで読み返すのだろう。何もかも全く分からない。ただ、今は、思いを五七五七七の形にのせることが楽しい。許される限り、詠みつづけたい。

選にあたって

おもしろい一連だった。比喩の多い連作である。物語でなく、情緒と気分が一連を貫いている。若い男性のもつ不安感とか憧憬といったものが基本にある。「シアン」は青空の色のこと(澄んだ青緑色)をいうのだと思う。「非日常」とか「選択肢」といった漢語がうまく働いている歌もあった。「ほんたうに言ひたきことを言の葉にかくしかくして千年が経つ」などという歌の格調の高さ。それでいて思いはよく出ていると思った。(岡井 隆)

期せずして、近藤芳美と同郷の広島在住の若い作者、始めのほうの「堅き心」「小暗き森」など、観念的な気負いが感じられたが、五、七首目あたりの自閉的にならざるを得ない、時代に生きる痛みに注目したい。猛毒の気体の「シアン」を比喩に使うなどして、快活に生きることへの焦慮や怯えにくじけるといって、若い世代の虚脱感が抉られている。十、十三首目なども納得できる。疎外される弱さを詠むことが、勁さを祈念するかのようである。(篠 弘)

「真夏のシアン」というタイトルが魅力的で、作者の主題そのものを表していると思われる。しかし、作品はこの主題に対する方法として、感覚的な表現をとっているため、抽象的な伝達になっている。「ぎらぎらの非日常」への思いを閉じこめて、無為の時間を生きている焦燥などが想像され、今日の情況を生きる青年の悩みが伝わる。ただ「真夏のシアン」という非日常の夢とは何だったのか。一瞬に燃えて滅びた恋だろうか。それは象徴なのか。もどかしさが残るところだ。(馬場あき子)

朝の陽が堅き心を貫きて目覚めよと言ふ恋せよと言ふ

日常のあふるる駅にぎらぎらの非日常をふりかざしゆく

水辺なる若葉の青のしたたるを眺むるわれの影はさびしも

何もかも小暗き森に閉ぢこめて忘れしことも忘れてしまふ

やみくもに戦ひ傷を増やすよりぢつとしてゐるとふ選択肢

くれなるのだるまは双の眼を持ちて部屋に居座る完全として

考ふる想ふ感ずる思案する心はいつもふるふるふるふ

あざやかな思ひ出そつとひもとけばさ渡る風は真夏のシアン

ほんたうに言ひたきことを言の葉にかくしかくして千年が経つ

解説を読めば読むほど両脚はぎこちなくなる走れなくなる

悶悶と終の裁き^{つひ}を待つ君よ星座の下へ駆け出してゆけ

長年の夢を遂げたる人の上さぞやさぞやと降りやまぬ星

職業の欄に「アルバイト」を埋めてしばし鳴らざる風鈴を見る

午前二時しろき器にひとつづつ歌のかけらを並べてゆかむ

ていねいに夜と朝とをくり返す空は逃げ出すべを持たざる

岡井 隆 選

選者賞 「滑走路」

萩原慎一郎（東京都）

恋をすることになるのだ この夏に出逢いたかったひとに出逢って

きみといる夏の時間は愛しくて仕事だということを忘れる

作業室にてふたりなり 仕事とは関係のない話がしたい

いつの日もきみの本心見えなくてジェットコースターの浮き沈みあり

辛口のカレーに舌は燃えながら恋するところこういうものか

青空の下でミネラルウォーターの箱をひたすら積み上げている

毎日の雑務の果てに思うのは「もっと勉強すればよかった」

真夜中の暗い部屋からころからきみはもう一度走り出せばいい

きみのため用意されたる滑走路きみは翼を手によればいい

かならずや通りの多い通りにも渡れるときがやってくるのだ

ヘッドホンしているだけの人生で終わりがたくない 何か変えたい

今日願ひ明日も願ひあさっても願ひ未来は変わってゆくさ

文語にて書くこととぼくはしているが何故か口語になっているのだ

草をかき分けてゆくごと文章を書いてゆくのだ 乗り越えるため

占いの結果以上にぼくたちが信じるべきは自分自身だ

選評

萩原慎一郎氏の連作「滑走路」は技巧の達人が一連で、読ませる。「きみのため用意されたる滑走路きみは翼を手によればいい」という歌がそのいい例である。口語調もいきいきとして一連をよみ易くしている。若い作者であり、今後の活躍も期待できる。

宮本加代子氏の「だまし絵」は絵画を材料にした歌を含んで、やはり技巧達人が一連といえる。「ほんのすこしきみしい時の遊びにて睦言のごとく独りごとをいふ」などが好例だろう。

初の十五首部門に七三〇作品が集まり、なかなか読みごたえのある作品も多かった。

老い・介護・旅行詠とか、連作のタネはいろいろあるだろうが、なるべく自分自身の日常に即して具体的にリアルに歌った方が特色も出るであろう。中・高年世代ばかりではなく若い世代からも応募があったことは嬉しいことであった。

来年も多くの応募があることを期待している。

（岡井 隆）

奨励賞

「だまし絵」

宮本加代子（岡山県）

エル・グレコ「受胎告知」のある街に生れて遠のくことなきままに
遠き遠き記憶の中のかなしみが一瞬宝石のごとくきらめく
モノクロのジェームス・ディーンのプロマイド『潮騒』の中からはらりと出でて
睡られぬ夜ふけの独りのものがたり起承転結の結なきままに
ほんのすこしさみしい時の遊びにて睦言のごとく独りごとをいふ
思ふこと遂げえぬままに一日過ぎ浄土と思ふ鐘ひとつ鳴る
消しゴムで消すがごとくに消したきことわたしのいひしあの嘘この嘘
今宵われの心の鬱は噴火寸前さらば蟹味噌さかなに「ルイ十三世」飲む
真夜の湯に過ぎゆく汽車の音きけば憎むところがどんどんひろがる
アンリ・ルソーのだまし絵のやうにだまされて大真面目に待つ百年われは
糸びす通りの角の帽子屋ほの暗く備前の壺には花もあらなく
もどらねばならぬ家ある疎ましき糠床のぬかをかきませかきませ
筑前煮が絶妙に旨いと言はれをり刀自なるわれの歳月あはれ
ぬばたまの闇に春雪ふりしきる一期は夢よと狂うて見たや
ゴッホの言葉「どこか遠くへ行きなさい」どこへ行くかは明日考えよう

奨励賞

「虹のリボン」

木下美樹枝（佐賀県）

降り出した雨を見上げるくちびるにあなたの指のちようちよが止まる
君は肩濡れないようにと抱き寄せてゆるりと咲く一本の傘
雨音と胸の鼓動はクレシエンド聞かれぬように離れぬように
「止んだの」と手を差し出して確かめる傘もこころも小さくなりゆく
雨上がり相合傘を閉じるなら虹はリボンを広げ始める
君と見るオレンジペコの夕焼けにしまっておこう明日の約束
ラベンダーの入浴剤を浮かべればさっきの想い出うすむらさき色
レモン色の朝陽差し込む洗面台Vの字つくるベアの歯ブラシ
ボーダーのシャツが海へと誘い出す揺れる想いにおへそが覗く
君を待つことがすこうし好きになる玄関先のまるい紫陽花
海の見えるバス停にふたり降り立ちてブルトパーズの傘を広げる
降り止んだ雨は潮風にさらわれて君の匂いと想う初夏
誰もいぬ渚に足跡つけながら想い出つくるコバルトブルー
そう君は突然が好き抱き寄せてさくら貝になるわたしを見てる
潮風がふれゆく頬にくちびるをあててあなたは駆け出していく

選者賞 「栗の毬」

市川 正子（岐阜県）

墓地にゆく黒き日傘の影のなか紫苑の花を胸元に抱き

きよろきよると守宮はのぞくいちにんの暮らしに点すひとつ灯りを

塩もみの輪切りの胡瓜が手に馴染みみどりしたたる夏のてのひら

足早に離りゆく日々よしえやし集合写真はもうほしくない

半日を隠りたる午後栗の毬のみどり蹴飛ばし畑の草刈る

カラスより先にいただく葉の裏に口をすぼめて笑う無花果を

休耕田にえのころぐさの尾が騒ぐ今宵来るべしステゴザウルス

こまごまと水引草は咲く積乱雲のような野党よ何処にゆきし

三十階のマンションにひとり住む友がばか喰いしては葉喰いする

じぶじぶと日に四百トンの汚染水遮光器土偶閣に見開く

何が秘密か、それが秘密であるらしい「特別秘密」になるか汚染水

謔かなる夜の雀蛾自律型無人機のようにまれに羽ばたく

競わせて間引かんために三粒ずつ畝に置きゆく隠元豆の種

留守電にしておく電話が鳴り始めふたつ息しておもむろに立つ

あかあかの月はのぼり来彼岸花まつ毛ちぢれて土手に消えたり

選評

近藤芳美の名を冠した賞である以上、みずみずしい抒情性を求めたいが、望み難い現況であろう。しかし、芳美が終始培ってきた時代感覚、ないしは批評眼といったものが、多くの作品に作用していたと思われる。如実に現出されていたことをよるこびたい。

選者賞「栗の毬」は、ひとり暮らしの感傷や孤独感に終始していない。むしろそうした日常を克服しようとして、自分のありかを見据える。多くの卑近な動植物を詠み込みながら、その逞しい生命力を撰取する。抗う自分が動植物のいのちと一体となり、寂寥感にみちた日常詠の域を超えている。自己に対する批評眼が内在するからである。

奨励賞に大友道子、あべまさこの二人を推した。さらに大西久美子、宮本加代子の諸氏も推したが、他の選者の奨励賞を受けられたことで、私なりに責務を果たした思いがする。第一回のレベルが高かったことを祝いたい。世代を超えて、新しい実力者を見出すべき貴重な場になることを願わずにはいられない。

（篠 弘）

奨励賞

「閑上」

大友 道子（宮城県）

津波にて逝きたる友の町近き東部道路ゆ海を望みぬ
門構へに水入り込む閑上の妖しき文字に心をのく
病身の妻の手握り激流の津波の海に逝きたる友は
神主と妻は津波に閑上の湊神社の小高き丘よ
悲しみを腹いっぱいに溜め込みし底魚51万ベクレル
風に乗り雨に含まれ運ばれて来るもの季節の便りにあらず
仮免の車で通ひし閑上の海の蒼さを今も忘れず
戴きし最後の手紙と一枚の職場の写真みな若かりし
病休を助けてくれし照乃さまアルツハイマーに冒されてゐしと
お二人の眠る寺より4Kの閑上の地に足踏み込めず
枯草の乱るる中に生ひ初むる母子草緑し津波の丘に
三日月の海に漂ふふはふはと海月群なす魂かぞと見る
焼きガレイ笹かま旨し閑上の潮の香流るる再開の店
残されて二年と六月なじよにしてなじよにして生きむ自らに問ふ
海望む小高き丘に一本の桜の苗木植ゑてきました

奨励賞

「ツール・ライフ」あべまさこ（富山県）

三十年抽斗にあるスタンプ台平たきなかにいまも潤う
錆ついたゼムクリップをとる肩に型押しされたQの字のこる
色分けたクリップボードは破棄までの異なる時間を鋼にはさむ
抜くことも失うことも傷みなくルーブリーフはノートを解く
背負いたるインクを緻密にまきながら右往左往にヘッドは走る
指先で崩れ惚ける消しゴムの滅私のかげら紙のみ受くる
刺す力折る力へと連なりて針塞ぐ技兵器より生るる
黒板に白板のシートはりつけて仮想の光を兎に満たさんか
色あせし紅白の付箋はみだせる折り目の浅き国語の指導書
びるびるとアラーム鳴れる教室にどっと吐かれる腸からの声
よりかかる重みをこえる重心にブックエンドは立ち仕事する
舟底の苗植ゑを説く拡声器五月の空はエコラリアきく
折れること受け入れながらシャーペンの胴に落とせる線細き芯
マーカーは平家螢の光ひき脳の枝葉へとまらんとする
限りなき数字を描くパー七本4と読みながらりをなぞる

馬場あき子 選

選者賞

「袴り／ネルソン・マンデラ氏」 松本千恵乃（福岡県）

奴隸船にて人知れず女性らも運ばれたるか 航くインド洋

なだらかな丘のみどりはさとうきびこの広さぶん奴隸のいたり

枯草に機銃のごとき眼あり自然保護区の老いしライオン

ロベン島に寄せる波音獄中のマンデラさんはいかに聴きしか

船底へ押されゆきつつ奴隸らが落としし涙か 波うつ光

入院のマンデラさんの方角へ花の面^も向ける喜望峰にて

隠れつつアパルトヘイト時代下を継がれ来し歌静かに聴きぬ

花の名をアフリカ青年書きくれぬ植民地時代の名前を添えて

土産屋のダチョウの卵冷たかり聴こうじゃないか夢の続きを

ハリケーン去りし黒人居住区に少年たちが始めるキツク

二千年を二枚の葉のみ伸ばしている（砂漠おもと）の葉はかたくあり

新聞の配達待ちぬ水無月をマンデラさんの危篤が続く

アフリカの紫花のジャカラランダわが庭に来て幹太めおり

誕生日を時差分早くおめでとうマンデラさんは九十五歳に

菊月の陽射し浴びつつ切り抜きぬマンデラさんの退院の記事

選評

第一回近藤芳美賞ということで投稿歌にも緊張があり、さすがに油断ならぬ作品が多かった。なかなか苦しい選択であった。堅実な詠風の一連にはもう少し完全を目指すのを控えても、と思い、自我満開の表現にはもう少しの自戒をと思う。だが決して中庸がいいわけではなく、ことばの問題はその連鎖感覚も含めてつねに何を表現できたかを問われる。

「袴り／ネルソン・マンデラ氏」「Gパンの巫女」「千の手花火」「滑走路」などは最後まで選び迷った。ネルソン・マンデラをうたった一連は南アの太陽の下を旅する中でこの想を得たらしい。少し甘やかだが大らかな追想である。まだ過去化できない偉人を心にもつことは、希求する方向も示しているだろう。他の三篇は危さがなく面白く読めたが、自作のスタイルがきっちり決まり、表出力はみごとだが、読者を充分もてなしてくれないといううらみが残る。

そのほか心に残った作品に「ツール・ライフ」「夢への一步」「虹のリボン」「ぼるつがる」など平明なうたい方の中に抒情のふくらみがあり、ソフトにタッチしている現実になつかしみがあふれる。ここから磨かれてゆくものに期待したい。

（馬場あき子）

奨励賞

「千の手花火」

森田小夜子（東京都）

早春のひかり透かして静止せりひとなき昼の大観覧車

庭樹々が針のごとくに芽吹く午後三時間かけ縫いもの終える

かくれんぼしては困らすいたずらな春の眼鏡を今宵も捜す

ひなげしの野に少女らのしゃぼん玉さざめきながら風にのりゆく

立ちどまりわれをしげしげ眺めおりシーズー犬に知りあいなきに

ビルとビル互いのすがた映しあうはざまを切りてカラス過れり

思い出の嵩だけの値をつけられてひっそり肩を寄せあう中古車

古びたるホワイトボードはぬぐいても消せない過去をうつすら残す

顔のなき男や女ゆき交えりカフェカーテンの窓の向こうに

少子化の進める国の朝刊にわさっと塾のチラシが溢る

ワンピースと似たビストロの花柄の壁際に坐すわれはナナフシ

これ以上風に逆らうことやめた銀の自転車ひとつらねに臥す

住宅街の偵察終えし斥候のカラスは仲間へ声高く告ぐ

現し世を逃れんとして深く深く冬の舗道に穴掘る男

いつせいに空に向かいて冬樹々は千の手花火かかげることし

奨励賞

「Gパンの巫女」

大西久美子（神奈川県）

ささくれの指であなたは荷をほどく時をりやさしい風を起こして

にんげんの臉が剥がれてゆくやうな桜吹雪のまんなかにもる

ゆらゆらと蝶一頭が飛んでゆく終電間際の自動改札

沈黙の臓器のやうに待つてをりわたしを嫌つてゐるはずなのに

ねつとりと練られた暑さに揺れてをり脂肪だらけのをんなの影が

ギフトオブライフ臓器提供意思表示カードをまるい鞆に入れる

雪洞のひかりに淡く溶けてゐる闇にとどかぬ暗さにひとり

やはらかい革のバッグの底にゐる白猫 驟雨となりて鳴きつつ

かさぶたにならない言葉、じんわりと口腔内に血を滲ませる

雲を吐く雲を見てをり天空にほどよき距離の八十五階

外灯に出現してゐるうすき影濃き影わたしがふたつに割れて

声帯にことばの種を植ゑたのに真冬の火星のやうに黙つた

五千年前のあなたに贈りしか丹色の残る櫛を見てをり

すきとほる樹脂の化石に覆はれてとほい時間を運ばれてゆく

着替へたら真夏のやうなひとだつた家路を急ぐGパンの巫女